あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。ルカ 18:14

イエスさまは様々なたとえ話をなさいますが、今日のように「自分は正しいと確信していて、他の人々を見下している人たちに」と、こんなふうに話す相手を辛辣に表現することはありません。大抵は「弟子たち」に向かって、「祭司長たちや民の長老たち」に向かって、「人々」に向かって、という具合です。よほどこの人たちに気づいてほしかったのでしょう。今日のたとえ話の登場人物は二人。パリサイ人と取税人。二人は祈るために神殿に入って、それぞれ祈ります。

パリサイ人は立って心の中で祈ります。**「神よ。私が他の人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいはこの取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」**一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて祈ります。**「神様、罪人の私をあわれんでください。」**イエスさまは最後に言われます。**「義と認められて家に帰ったのは、パリサイ人ではなく取税人です。」**神様に義と認められ正しいと判定されたのは取税人で、パリサイ人は神様の目には敵わず義と認められなかったというのです。義と認められないとどうなるのでしょう？天国にはいけないということです。大変です。

パリサイ人は律法を厳格に守るのに熱心でした。ユダヤ社会では信仰の篤い人と見られました。一方、取税人は、ローマに納める税金を同胞のユダヤ人から集める仕事をしていたので、ローマの手先、裏切り者とされ、宗教的にも神を知らない異邦人は罪人ですから、その下で働く取税人にも異邦人の罪が伝染するから罪人だと考えられました。また、取税人の中には税金を徴収する際、規定より多く集めて自分の懐に入れ私腹を肥やしている人もいましたから嫌われました。

まずはパリサイ人の祈りを見ましょう。**「パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』」**(11-12)

この時代、「立って」「目を天に向けて」祈るのが一般的な祈りの姿勢です。パリサイ人は「神様」と呼びかけ、「私はあなたに感謝します」と感謝の祈りを捧げて模範的です。では、何を感謝しているのでしょうか。「他の人たちのようでないこと、他の人たちと違うこと」を感謝しています。他の人たちとは、具体的には「奪い取る者」(強欲なガツガツするという意味から強奪するという意味)、「不正な者」(9 節の「(自分は)“正しい”」を打ち消す形)、「姦淫する者」(文字通り)、さらには「“この”取税人のやから」と軽蔑的な言い方で名指しします。「パリサイ派」との表現は B.C.２世紀後半頃に出てきて、語源は諸説あり、中でも「分離する者、人と自分を分け隔てる」との意味が有力と言われます。そう思うと、「この世には様々な悪人どもがいますが、私はそんな連中とは違う、特にあの取税人のようなとんでもない罪人とは全く違う生き方ができていることを感謝します」とはいかにもパリサイ人らしい祈りです。そして、自分が神様のためにどんなに人一倍良いことをしているかを祈ります。私は断食も献金も人一倍ちゃんとしています、ということです。

そもそも、旧約聖書では、断食は年に一度「贖罪の日（宥めの日)」に行うことが定められているだけです。その後、イスラエルが歴史の中で危機に瀕する度に、断食する機会が増えていき、この時代には毎週月曜日と木曜日の２回断食をするようになって、このパリサイ人はその通りにしているというのです。「十分の一を献げる」ことについても、モーセの律法では、農作物や生まれた家畜の十分の一を献げることが決められているだけですが、このパリサイ人は全収入の十分の一をきっちりと献げていると言います。要するに、「私はほかの人たちが真似できないような素晴らしい信仰の行いをしています」と神様にとうとうと述べているのです。

11 節に「心の中で祈った」とありますが、そのまま訳すと「自分自身に向かって祈った」です。普通ユダヤ人は祈る時、声に出して祈ったそうですが、ここでパリサイ人は声に出さずに祈っています。ですから、声を出さずに自分自身に向かって、つまり「自分の心の中で」という訳にしたのでしょう。でも「心の中で」の「で」という言葉は方向性を表すので、彼の祈りは自分に向かっていました。パリサイ人は確かに「神よ」と祈りますが、彼が見ていたのは「神」ではありません。自分と違う罪にまみれた「ほかの人たち」～奪い取る者、不正な者、姦淫を犯す者～の姿であり、この祈りの場に本来神殿に来る資格などないのに図々しく来ている取税人。彼らと自分を見比べて、こんな人たちのようではない自分を感謝しているのです。そして、「私は～しています」「忘れずにずっとしています」と、自分がどんなに熱心に信仰生活をし、どれだけ忠実に主に仕えているか、パリサイ人はひたすら自分を見つめます。自分を神に売り込むような祈りです。まさに「自分に向かって」自分を称賛するのです。そこに神の姿は見えません。神への祈りではなくなっています。

では、次に、取税人の祈りを見てみましょう。**「一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』」**(13 節)

取税人も、みんながするように、「立って」祈りました。でも、パリサイ人が祈る場所から遠く離れたところで、神殿の真ん中になど到底行けなかったのでしょう。「目を天に向けようともせず」この「せず」とはとても強い否定ですから「神のおられる天に目を向けるなんて畏れ多くてとんでもない。とても神に顔向けできない」との思いでしょうか。しかも「胸を叩く」とは、非常に激しい悲しみ、嘆きを表す際のユダヤの表現です。あまりの悲しみに打ちひしがれて、まともに顔を上げて祈ることもできなかったのです。ですから、「祈った」ではなく「言った」と記されています。

そうして、ようやく言葉を発します。「神よ。」パリサイ人と同じ言葉で始まります。「罪人の私をあわれんでください。神よ」と神の前に立った時、取税人は「私は罪人だ」と告白します。しかも、ここではわざわざ「the sinner」と、ただの罪人ではない、罪人と言えば私のことだ、自分は罪人の代表だと告白するのです。これは、パリサイ人が思うような、取税人という職業が汚れているから罪人というのではありません。取税人が騙し取ったというような一つ一つの悪事を取り上げて罪人だと言うのでもありません。自分という全人格は罪まみれだ、私は罪の塊だという意味です。こんな罪人の私が聖なる神さまの前に出たら、死ぬしかない、あまりに惨めで、悲しみに打ちひしがれて、だから胸を打ち叩いて悲しんだのでしょう。そしてこんな罪人がまた神様と交わることができるようになるには、ただ神様の憐れみにすがるほかなか

ったのです。聖書には「憐れんでください」（エレエーソン・メ）という祈りがいくつも出てきます。讃美歌にも「キリエ・エレイソン」（主よ、憐れみたまえ）とあるように、「憐憫の情をもって私をお取り扱いください」という意味です。

でも、今日の箇所はその意味ではありません。「慈悲深い」という意味もあるのですが、「宥める」「鎮める」を意味する言葉です。聖書ではここともう一箇所ヘブル書 2:17 で「罪の宥めがなされた」と訳されています。またこの名詞形がローマ 3:25 と第一ヨハネ 2:2 で「宥めのささげ物」と訳されています。これはただ漠然と「罪深い私をあわれんでください」と情に訴えているのではありません。罪を犯した人間に対する神の怒りを、宥めのささげ物をもって鎮めてもらい、再び神と交わりができるようにしてください。「憐れんでください」の中身はこういうことです。つまり、取税人は、「神様、私はどうしようもない罪人ですが、この私の罪をあなたの憐れみによってお赦しください」と祈っているのです。

「あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」（14）

「義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのパリサイ人ではない」、これがイエスさまの結論です。「義とされる」とは、「義と認められる、正しい者と判定される」ということです。それをすることができるのは神様だけです。取税人は神様から正しい者と認められて家に帰りました。取税人の祈りは聞かれたのです。取税人が願った罪の赦しが与えられ、神様との関係が回復された、つまり救われたのです。一方、パリサイ人は神様から正しい者と認められませんでした。「あんなに素晴らしい人はいない」と人々から評価されようと、自分でも「これくらいやれば大丈夫だろう」そう思っても、でも、神様からは義と認めてもらえませんでした。パリサイ人は神様から見れば罪人だったのです。

私たちはどうすればいいのでしょうか？次を見てみましょう。**「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」（14 節後半）**パリサイ人は「自分は周囲の罪人とは違い、神様にしっかり仕えている正しい者だ」と自分を高く評価したので、神様に低くされ罪人と宣告されました。それに対し、取税人は「自分は神様の前に出るに値しない罪人だ」と自分を低く評価したので、神様は彼を高くし、罪を赦して義としてくださいました。そう思うと、ここでイエスさまが言いたいことは、自分の立派なところ、優れたところ、信仰深く神様に仕えていることを見て自分を高く評価するのではなく、自分の欠点や罪にこそ目を留め、自分を低く評価する者を神様は高く評価してくださるということでしょうか。ということは、神様に高く評価してもらいたければ、自分をできるだけ低く評価した方がいいということになるでしょう。このたとえはそういうことを教えているのでしょうか？もう一度二人の祈りを振り返ってみましょう。

パリサイ人は神様に祈りをささげていません。彼が見ていたのは「他の人」であり「自分」です。神の前にではなく、人の前に立っていたのです。ボンヘッファーは感謝について次のように言います。

「パリサイ人は『正しい心で』感謝できなかった。パリサイ人が『正しい心を持って』感謝していたら、感謝しつつ自分を忘れることになっただろう。そして、自分を神の前で『何か誇るべきものを持つ者』とは見なさなかっただろう。」

「世の感謝は、結局、いつも自分自身のことを思う。」

「感謝は、賜物を与えてくれる神へと私を引き返らせ、その上で新たに神の要求へと前進させる。そしてその神により、私は自分に新たに与えられる神の義を発見する。」

パリサイ人は感謝と言いつつ、その先にそうできるようにしてくださった神様が見えなかったのです。パリサイ人は「自分に向かって」祈りました。彼の関心事は「自分」と「他の人」です。

今日のたとえ話の対象は、誰だったのでしょうか。

「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。」（9）

「確信する」とは「堅く信じる」「信頼をおく」「頼みにする」、そして「見下す」とは「何もないかのように見なす、扱う」「徹底的に軽蔑する」との意味があります。「自分」と「他の人」まさにパリサイ人の姿そのものです。そこに神様がいなければ、人しか見えません。人との間でより安心して生きるには、より高い評価を得たいと考えます。人の目にどう見えるのか、人と比べ続けるのです。周りの人たちはそうやって生きているのではないでしょうか。

昔、息子が小学生の頃、「今日クラスでこんなことがあったよ」と話してくれました。学校で豆テストがあり、普段勉強のよくできる友達が、珍しくその日はできませんでした。そしたら、その子が「こんな庶民の問題できなくたっていいんだ」と言ったというのです。息子の関心は「『庶民』って何？」ということでしたが、私はゾッとしました。塾の影響なのか、ご両親の教えなのかわかりませんが、そうやって優越感や劣等感を利用して子どもたちを勉強させているんだなと。その行き着く先はどこでしょうか？いつまでそうやって比べながら生きていくのでしょうか？苦しいです。

皆さんはどこに立っておられますか？神様の前に立ちましょう。神の前では、人と比べてほくそ笑む自分など吹っ飛んでしまいます。絶対的な義なる神の前で、私の正しさを述べるなどとてもできません。責められるしかないのですから。すべてをくださった神様に「私はこんないいことをしました」と誇るなんて滅相もありません。神様のおかげでできたのですから。神の前ではただただ恐れて、取税人のように「罪深い私をあわれんでください」と祈る他ありません。

わざわざ「自分」を高くしなくても、神様が人を「高く」してくださいます。「自分」を正しいとしなくても、神様が人を義と認めてくださいます。

「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。」（ローマ 3:24 ～ 25）

神様に向かって心から「私をあわれんでください」と言うならば、神様はその言葉を「祈り」としてしっかりと受け取って、私たちの罪を赦し、義と認めてくださいます。そのために、神の独り子のイエスさまは私たちの罪の宥めのささげ物として十字架にかかって死んでくださったのですから。今週も、主の前に立っているかを日々確認しながら、私たちを高く上げてくださる主、義と認めてくださる主を見上げつつ歩んでまいりましょう。